

イトイカンジ派の「東京アンビート」はヨーロッパをさまよひ、ゼロ次元儀式映画でフィルムをまわす「おおえまさのり」は幻覚体験による宇宙次元のラブを宣言するティモシー・リアリーの弟子をめざして=ニューヨークにこのあと出発したし、桜井も「こんにやく communion」をサンフランシスコで開示することになった。この日から数年後に伊豆の海中に自滅していった「アンドロメダ」の浅井ますお、は頼戸の堀窯に全国の家出中学女子生徒を集めて奇妙な共同生活を送っているフェテッシュな詩人だった。また 1969 年の儀式派全国集団が、地球上の全領域から地響きをたてて同時発生することになる「地界よりの活動（アングラ）」で、日本からも「ええじゃないか行進」を出発させた「万博博破壊共闘派」の闘争巡礼の途中の「京都大学儀演」で、京大屋上より一本の地面にわたされた「ひも」にぶらさがって降りるハブニングをやって失敗し墜落した水上旬のかおもあった。ひもにぶらさがらなければ「高度な位置に」かけ登れず、そこから手を離せば「コンクリートの地面で」挫折せざるをえない危険な狭き「つな渡り」の文明社会の細き道を、精神がずたずたに引き裂かれて不安におびえる一本の「わらひも」になった僕達の肉体を、桜井の太っちょの肉布団が、夜が明けるまで、このときゆさぶりつづけ、僕達の身体に「エクスタシー」と呼ばれる快感が、波のように地底からひびいてきた、ことを忘れることができないだろう。自らかぶって飛んだ仮面への憎悪の闘争で、仮面がはがされたときに自分自身も実体なき虚空をさまよう霊界者であることに気付く以前に、このとき僕達をゆさぶり続ける「快樂」の布団の感触が、文化という虚空にぶらさげられた人間界のサーカスつなわたり装置を、地面から受けとめていた、もう一つの未知なる「カルチャー（文化）」だったのではないか、ということ、僕は桜井の顔を思い浮べるたびに、今ときどき、ふっとおもいだすのである。

最近の桜井は僕にこんなふう云った。「シェンシェイ、一つ、僕の絵ば買うちゃらんねえ-、僕の絵を見てると、ガンやエイズにならないとフランス人も云いよりますけんね。ばってん、僕のアートは精神の自然食品ですから、買うちゃらんねえー」